

柏原高校が指定校に

文科省「普通科
改革支援事業」

特色ある学びに向け

「知の探究」改編

文科省「普通科改革支援事業」の指定校となった。全国で19校、県内では御影高校との2校が指定された。県教育委員会は、柏原高校における2024年度の新学科設置（予定）に向け、「知の探究コース」の改編を進めていくとしている。

文科省は、「高校生の

多様な能力や適性、興味や関心などに応じた学びを表現することが必要」と考えており、昨年1月の中央教育審議委員会等においては、新時代に対応した高校教育の在り方について、高校の普通科改革を巡り、生徒が多様な学びに接することができるようになるように教科横断的な学びを進める重要性が示された。

柏原高校は、同事業におけるスローガンを「地域力を活用した」、「多様な価値観を共有する人材」を育成する教育課程の開発と掲げ、「知の探究コース」の改編に取り組み方向性や内容として、▽文理融合型の課題探究を軸とした教育課程または、地域の教育資源を活用して地域課題の解決に取り組む学びを軸とした教育課程を編成する▽地域の行政機関や事業者などとの連携協力体制を整え、その連絡調整を行うコーディネーターを配置することなどを挙げている。また、「探究」の科目を深化させるため、現在の3単位から7

文科省の「新時代に対応した高等学校改革推進事業」の指定校となった柏原高校＝柏原町東奥で



単位を増やすことなどを検討している。同校の大垣章代校長は、「わが校のミッションは、地域を支える人材と全国、世界で活躍するリーダーの育成。それを表現するためには、主体的に物事に挑戦し、多様な価値観を理解して協働できる、また、地域課題解決に寄与する生徒を育てることが大切」とした。

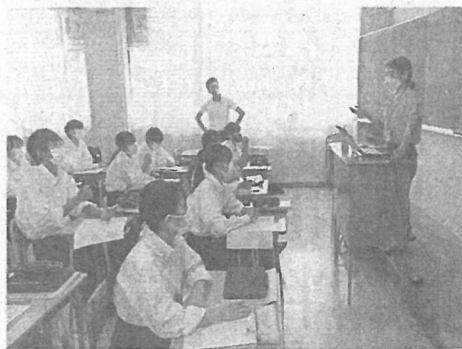
（大治庄三）

市が探究テーマ提案

市が探究テーマ提案 協働で地域課題解決へ

柏原高校1年の2・5組の生徒を対象に15日、同校で「地域協働学習」の授業があった。地域課題解決への取り組みの最前線にいる丹波市職員が課題の提供と講義を行った。生徒たちは、5人の市職員から、▽公共交通▽ごみ問題▽健康▽化石資源▽生物多様性の5つのテーマから2つを選択。現状と課題を聞き、来年1月までにまとめる自身の探究テーマを探った。（大治庄三）

水切れフィールドミュージアムの朴館長補佐から氷上回廊の生物多様性の豊かさについて講義を受ける生徒たち＝柏原町東奥で



交通・ごみなど5つ

身近な社会の課題とそとの解決に取り組む大人の視点を知り、市民の一員として何ができるかを考え、気付きを共有する探究授業。

市教育委員会社会教育・文化財課の教育普及専門員で、氷上回廊水切れフィールドミュージアム館長補佐の朴希さん、生物多様性をテーマと瀬戸内海側のどちらに

も楽に行き来できること、好きな分野とはいえないから、太古から人々の通らざる道となり、豊かな暮らしや文化を育んだ。動植物もこのルートを使って分布を広げ、氷上回廊一帯は生物多様性の宝庫となった」と解説した。

しかし、スケールが大き過ぎることもあって、「概念として分かりにくい中央分水界、水切れ。視覚的、感覚的に分かりやすく、多くの人々に知ってもらえる方法はないか」と施設としての課題を生徒に伝え、「目には見えない生物多様性。どこに、どのような生物がどれだけのいるのかも把握できていない。市民と一緒に調査、保全する方を中心に、南北に標高差のあまりない低地が、生物多様性を広くPRするト状に続くルート「氷上回廊」をイラストで示し、「高い山を越える苦労をしながらも日本海側と瀬戸内海側のどちらに

好みな分野とはいえないが、頑張りた」と話していた。

行政から探究テーマとなる地域課題を提案して行政から探究テーマとなる地域課題を提案して行政から探究テーマとなる地域課題を提案して行政から探究テーマとなる地域課題を提案して

余田温君（市島出身）は、「丹波の自然に興味があつて受講した。

なぜ大腸がんが少ない？

柏原高 課題探究の成果発表

柏原高校で20日、探究校内発表会があった。1、2年生(計391人)と3年生の「グローバル」選択者(16人)が、自ら課題を見つけ、その解決に向けて探究した経緯や結果をタブレットでデータ表示しながら発表した。少子化における特別支援教育の在り方や、ワクチン接種率と感染率の関係性、在日外国人の生活向上、セクシャルマイノリティーの課題など、生徒たちの多岐にわたる新鮮な視点、柔軟な発想がうかがえ、探究する上での苦労も垣間見える発表となった。1年生は個人で、2年生はグループで取り組んだ。(太田庄三)



自らテーマを設定し探究してきたことを発表する2年生のグループ＝柏原町東奥で

2年生の久米健斗君、平出歩君、藤吉広大君のグループは、「丹波市に大腸がん患者が少ない理由」をテーマに発表した。丹波市が県内で大腸がん患者が最も少ないことに着目。「その理由を見つけて出すことで、がんの予防に生かす」ことを狙った。

調査方法は、行政への聞き取りや、論文などからデータを抽出。「大腸がんは肥満関連がんのため、生活習慣が大きく影響している」と考えた。全国で大腸がん患者が最も多い長崎県と、一番少ない沖縄県を比較すると、肥満率、食塩摂取量はわずかな差であ

野菜類摂取量、運動・喫煙・飲酒習慣などを調査したところ、「食事と運動習慣が大きく関係していることが分かった。」	この結論をもとに、丹波市と、近隣市の中で最も大腸がん患者が多い伊丹市とを比べ、▽大腸がん患者▽肥満者▽運動習慣のある人の割合を順
に並べると、丹波市が0・11%(人口6万2152人に対し69人)、伊丹市が0・17%(20万2505人に対し345人)、28・9%、44・0%だった。	このことから、「肥満者数はわずかな差であ

り、運動習慣がある人は伊丹の方が多い。長崎と沖縄との比較から導き出した関連性は丹波市には当てはまらなかった。丹波市には運動習慣以外に大腸がん患者が少ない要因がある」とし、「今回、要因を見つけていることができなかったが、今後、視点を変えて要因を探りたい」と締めくくった。

発表に耳を傾けていた生徒や教員は、「丹波市の医療体制が影響しているのでは」「空気や土水など、まだまだいろんな要素を調べるのができるのでは」などと感想を伝えていた。

「地域課題から世界考える」 柏原高校 LGBT・Q問題など探究



「丹波の課題は世界の課題」と捉え、地球規模の視野で考えて課題を設定し、地域視点で行動して解決策を提案する「地域課題から世界を考える日」がこのほど柏原高校であり、生徒が約100本の研究成果を発表した。一部は外部に向けてオンライン配信された。

2年生の片山暁人君と山本愛莉さんの組は、「パートナーシップ制度を丹波市に導入しよう」をテーマに、日本のLGBT・Q問題に関する同性婚について探究、発表した。

同性婚を合法化している国はオランダ、スペイン、台湾などがあるが、日本では認められていないことや、国内で同制度を導入している自治体は、昨年10月時点で約240あることを紹介。三重県は高校生からの要望を受けて導入した経緯があり、「同じように丹波市に制度を提言すれば実現の可能性があるのではないか」と考えた。

2人はLGBT・Qに関する市民アンケートを実施。回答した220人の123人が19歳以下と年代に偏りがあることを報告した上で、ジェンダーレスについての賛成派や、同性婚を合法化することに賛成する人も多く、パートナーシップ制度を「知っている」「言葉は知っている」割合が全体の3分の2を占めていたことを報告した。

外部配信のため、カメラの前で探究成果を披露する生徒たち＝柏原町東奥で

丹波から TAMBA へ・自己理解と他者理解の螺旋

地域力を活用した、「多様な価値観を共有する人材」を育成する教育課程の開発

新時代に対応した高等学校改革推進事業(普通科改革支援事業)

2022年度(令和4年度)活動報告集

発行日 令和5年3月31日

発行者 兵庫県立柏原高等学校

〒669-3302 兵庫県丹波市柏原町東奥50

TEL 0795-72-1166 FAX 0795-72-1168



学校 HP



「くりゅう」

(マスコットキャラクター)